Japanese Association for Religious Studies

れていることである。ここには、カルデア神託を重視した新プラトン主義者のイアンブリコスを転回点とする流れが見られ、彼は上昇のための浄化をもたらす神からの光を受容するものとオケーマを捉えるなど、儀礼的実践の重要な対象と見なしている。

こうした様相は、プラトニズムに実践を伴った宗教思想としての特徴を与えているとともに、ギリシア哲学の伝統と儀礼的実践との合流という、哲学と宗教が交錯した、あるいは不可分に一つとなったあり方を見せていると考えられる。

アウグスティヌス『告白』における新プラトン主義の位置づけ

山田庄太郎

本発表では、構造論的観点から『告白』における新プラトン主義についての語りを分析することを通し、同書の中で新プラトン主義がどのように位置づけられ、かつまた、いかなる機能を有しているかを明らかにすることを試みた。

我々はまず『告白』における新プラトン主義への言及について検討を加えた。これらの言及は全て「プラトン派の書物」という語句を以って為されており、その語りの時制は同書七巻で語られる三一歳当時のアウグスティヌスを指し示していることが確認された。

次に、加藤信朗『アウグスティヌス『告白録』講義』（知泉書館、二〇〇六年、八九―九〇頁）ならびに宮本久雄「アウグスティヌス文学のヘブライ的地平――『告白録』第一～第九巻における「キアスムス（交差対応的配列法）」構造」（『パトリスティカ』一三号、二〇〇九年、一四二―八頁）の指摘を基に、『告白』の構造論的解釈の一つとして、同書一―九巻のキアスムス構造に着目した。このキアスムス構造によって、第七巻で語られる「プラトン派の書物」が、第三巻で語られる『ホルテンシウス』のカウンターパートとして『告白』の内に配されていることが明らかとなった。

キケロの著作『ホルテンシウス』は、青年期のアウグスティヌスに対し、知恵への愛を燃え立たせると共に、聖書の単純な文体への失望をもたらし、「理性的な」宗教としてマニ教への入信に至らしめたことが『告白』の記述から知られる。他方、「プラトン派の書物」は、それによって引き起こされたミラノの上昇体験の結果としてマニ教からの訣別をもたらし、再び聖書を手に取る為の契機として位置づけられる。従ってこの二つの書物は、共に聖書との関連で語られながらも、正反対の帰結を導くものとして『告白』の中で対称的に描かれている。

『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」は、それぞれ、アカデミア派とストア派とを折衷した哲学者キケロと、プラトン派とに帰される。アウグスティヌスは回心直後の著作『アカデミア派駁論』の中で、霊的で確実なものを教えるプラトン哲学――あるいはその純粋な復興体としての新プラトン主義――を、懐疑主義を特徴とするアカデミア派ならびに物質主義的なストア派の双方と対立させていた。それによれば、アカデミア

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

派懐疑論は、ストアの教えに対し「反対のことを教える dedocere」ものであるが、プラトンの教え或いは新プラトン主義からは区別され、その本来の教えを懐疑によって「覆い隠した」ものとして規定される。従って『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」との対置は、キケロによって灯された知恵への愛がこの偉大なラテン作家の名から想定されるストア的、アカデミア派的思考形式から今や離れて、新しい知の枠組みへと昇華していくことを予示するものと言える。

無論、アウグスティヌスは、聖書こそが真の救済を約束するものであるとして、キリスト教信仰に対する新プラトン主義の限界性を認める。但しこれは、新プラトン主義を退けるものではなく、聖書こそが「プラトン派の書物」の不足を補い、救済という究極的な目的を導入することによっていわば適切な方向づけをそれに与えるということを示すものである。このような観念は既に初期の著作『真の宗教』にも見出されるものであった。

構造論的観点から言えば、これによってマニ教からの離反は、マニ教という「理性的キリスト教」の放棄と土着的で素朴なキリスト教への回帰としてではなく、むしろより「理性的で哲学的な」思想としてのニカエア・キリスト教の「再」発見として読まれることが可能となるのである。

キリスト教教義の視覚化とその受容

細田あや子

多種多様な宗教図像の内容に即してその特徴をみてみると、神や超越者、宗教上の（重要）人物についての図像（神像、仏像、教祖の伝記など）、宗教文書に基づいた図像、宗教の教えや教義についての図像、シンボル、幾何学的な形体といったものに大きく分けられる。これらのうち本発表では教義の図像として、キリスト教教義のなかの三位一体の表象イメージを取り上げ、それがどのように視覚化されているか、いくつかの代表的な図像タイプをおさえながらみてゆく。さらに図像のヴァリエーションを考察するなかで、中世ドイツの幻視者ヒルデガルト・フォン・ビンゲン（一〇九八―一一七九）のヴィジョンにあらわれる三位一体の図像に注目し、この教義がどのように受容されていったかという点についても考えてゆきたい。

「恩寵の座」とよばれるタイプのものは、父なる神が処刑されたわが子イエスを十字架ごと胸に抱きかかえる図像である。父の口から鳩が出ているものもあり、聖霊が父と子を結びつける役割を果たしていることが見て取れる。この三位一体の図像において、子の位格を十字架にかけられた者として表現するのは、イエスの受難を経たあとでなくては救済史の成就はありえないという教義を明確にするためと考えられる。

ヒルデガルト・フォン・ビンゲンの幻視著作のなかの『スキヴィアス』（第二部幻視二）に、三位一体のヴィジョンが見い

NII-Electronic Library Service